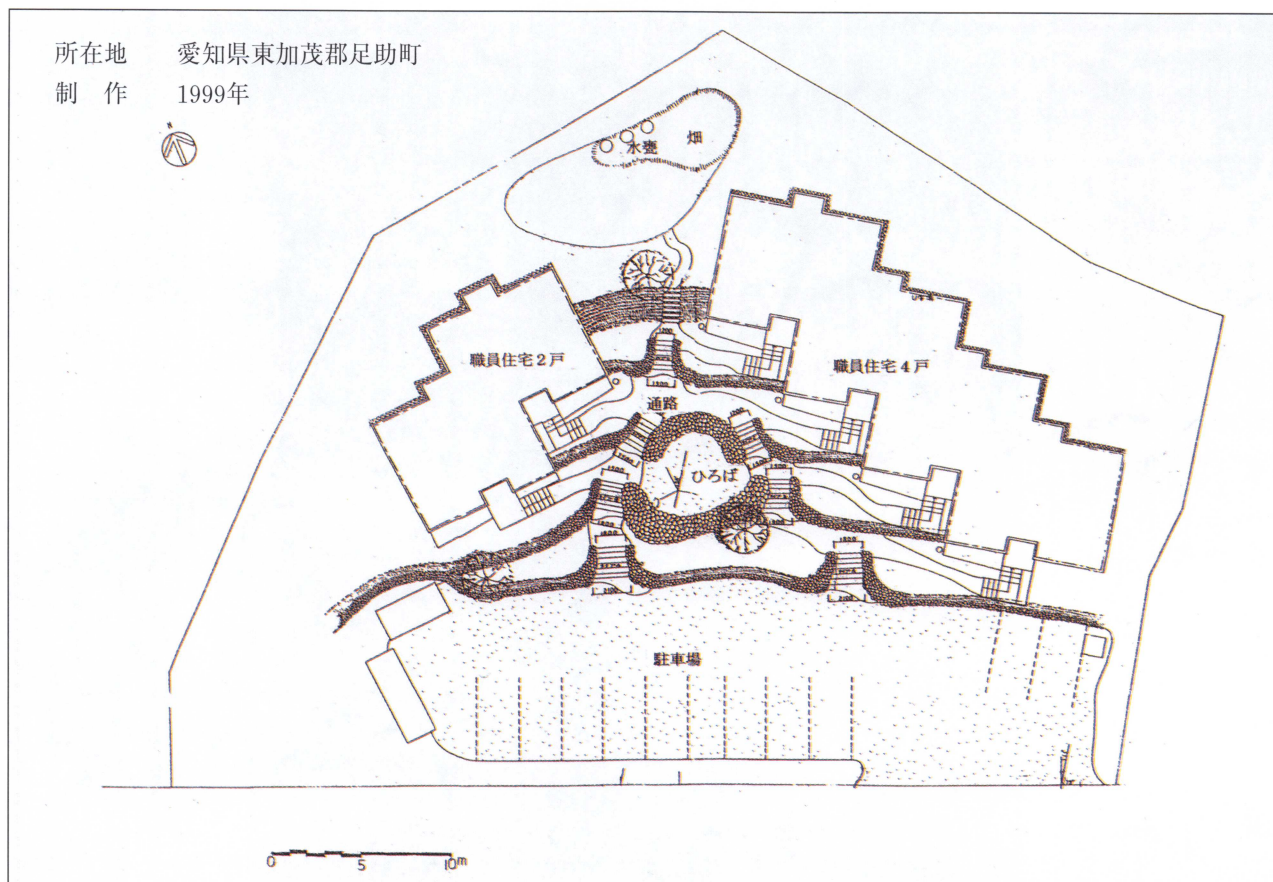


こうろげ 足助町高嶺下職員住宅外空間

～足助町 農ある暮らしの模索～

岡田憲久 Norihisa Okada



全体計画平面図

過疎化する足助町の定住促進モデル地区、また重点整備地区として1996年から計画が進行中の高嶺下地区北西隣に職員住宅2棟6戸が竣工された。

高嶺下地区の計画は「農のある暮らしと都市交流」を目的とした集落づくりであり、将来的には山の斜面を利用して戸建てコーポラティブ方式による宅地整備、またレストラン、イベント広場、宿泊施設等の建設構想も成されている。そのコンセプトの中心にあるのが、定住者を迎え荒廃する山里や農地を再生させたいという思いである。

定住者として必ずしも農業希望者を募っているわけではなく、よりゆるやかに「農のある暮らし」を求める人々を受け入れることで、多様な人々からなる豊かなコミュニティを創造しようとしている。平成11、12年とワークショップを重ね、この地でどのような暮らしが求められるのかが幾度も話し合われた。

足助職員住宅がこの計画の先陣を切って竣工したのは、まず職員が入居することによって、この計画に対する町の責任を広く示す意図があつてのことである。

現場は草地化した急斜面地であり、そこに階段状に這い登るように2棟の建物が建築された。外部空間は必然的に6段の造成盤と成らざるを得ず、その擁壁を農的景のデザインとして棚田をイメージした石垣を施した。素材は地域の碎石場から出るグレー系の割栗石を用いた空積みとし、階段の袖部は石を天端まで巻き込む手法でアクセントを造った。小段の3段目には出会いの場、井戸端会議の場、イベント広場となるような開けた空間を設けた。

植栽は山の春をいち早く告げるコブシの木を2本植樹するに留め荒々しく露出する裸地には早く草が進入し、地域の自然の植生が戻ることを願うこととした。

今回の石積みと土舗装の道は、今後展開する高嶺下の洞の整備・修景手法の実験でもある。また、最上段には畑が出来るように土と甕を設置したが、これもまた高嶺下地区の農的暮らしの意味を集約したものである。



高嶺下のワークショップ



ワークショップを重ねながら、コーポラティブ方式で農のある暮らしを考える。



高嶺下の洞の自然観察会



自力建設の小屋で話しながら、現地での暮らしを見る、考える



田植え、稲刈りなどの実験的実践活動が行われている。



ワークショップの拠点となる自力建設の小屋



ワークショップの風景

職員住宅ディテール



割栗石による石垣、角を丸めた階段



畑と水甕





高嶺下住宅全景と石垣



井戸端会議の広場



有機的な曲線を描く石垣と土舗装の通路、井戸端会議の広場



住宅に面した高嶺下の谷筋